

膠着語における述「語」形成と意味



准教授 中嶋 崇

研究分野

言語の系統発生について認知科学的見地から研究しています。

研究内容

意味の伝達は音と語を構造的に結び付けることで可能になります。語の成り立ちを研究するのが形態論で、構造の派生メカニズムを研究するのが統語論です。

私の研究のポイント

従来形態論と統語論は独立した分野と考えられてきましたが、「拡散形態論^(*)」の登場以降、これらは同一の現象として扱うべきだとする考え方が主流になってきました。これはいわゆる膠着と言われる述語形成過程を持つ日本語のような言語を分析する際、非常に有効だと考えられます。なぜならば膠着語の述語は「語」としての特徴を備える一方、文の派生を司るという統語的特徴を同時に持つからです。複雑な述「語」の部分がどのように文として統語的に意味を派生させるのかを明らかにするのが私の研究のポイントです。

REPORT リポート

日本語の形容詞は直接述語を作るため、動詞にとっても近いと言われます。

(1) a. 花子は注射が怖かった。(形容詞)

b. 花子は注射を怖がった。(動詞)

述「語」「怖かった/怖がった」を通時形態論的に分析すると、

(2) kowa-k-ar-ta

となり、形容詞と動詞で区別がありません。ところが(1)では子音/k/が清音/k/か濁音/g/かで述語の品詞が異なっています。これはなぜでしょうか。私はこれは統語的構造の違いからきていると考えています。文の構造を(3)に示すと、/k/と/ar-/の間に介在する空主要部^(*)の数でaとb.では差があることがわかります。

(3) a. [花子 [pro [注射が [[kowa] k | \emptyset | \emptyset] ar-] ta

b. [花子 [pro [注射を [kowa] $\mathbf{g(=k)}$ | \emptyset] ar-] ta

形容詞述語(3a)では音素的には空である主要部が2つ介在する一方、動詞述語(3b)では介在する空主要部は1つだけです。この差は品詞の性質の違いからきています。形容詞は基本的に目的語を取らないため、動詞において目的語に相当する「注射」を導入する主要部を追加しなければなりません。一方動詞述語では「注射」は目的語の位置に直接生成されるため、その必要はありません。/k/の濁音化は助動詞/ar-/によって引き起こされると考えられますから、述語内部での濁音化は、1つ以上の空主要部を超えて作用することはできないとする仮説が得られます。勿論これは他言語の現象も視野に入れ検証してゆく必要があります。